

研究拠点形成事業
平成 29 年度 実施報告書
B.アジア・アフリカ学術基盤形成型

1. 拠点機関

日本側拠点機関：	愛知県公立大学法人 愛知県立芸術大学
(ウズベキスタン)側拠点機関：	ウズベキスタン芸術大学
(中国)側拠点機関：	大連民族大学
(韓国)側拠点機関：	檀国大学校

2. 研究交流課題名

(和文)：現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ～サマルカンド紙の復興を中心に～
(交流分野：芸術表現)

(英文)：The research for the culture of contemporary Hand-Made Paper and artistic expression.
~With the focus on the revival of Samarkand paper~
(交流分野：Artistic expression)

研究交流課題に係るホームページ：http://labo.a-mz.com/paper/

3. 採用期間

平成 29 年 4 月 1 日 ～ 平成 32 年 3 月 31 日
(1 年度目)

4. 実施体制**日本側実施組織**

拠点機関：愛知県立芸術大学

実施組織代表者(所属部局・職・氏名)：学長・松村公嗣

コーディネーター(所属部局・職・氏名)：美術学部・教授・柴崎幸次

協力機関：豊田市和紙のふるさと、愛知県立大学

事務組織：愛知県立芸術大学 芸術創造センター、芸術情報課

相手国側実施組織 (拠点機関名・協力機関名は、和英併記願います。)

(1) 国名：ウズベキスタン

拠点機関：(英文) National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod
(和文) ウズベキスタン芸術大学

コーディネーター(所属部局・職名・氏名)：(英文) Head of International Relations Department,
Senior teacher, Fazilat KODIROVA

(2) 国名：中国

拠点機関：(英文) Dalian Nationalities University

(和文) 大連民族大学

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Faculty of Design, Professor, MA Chun Dong

(3) 国名：韓国

拠点機関：(英文) Dankook University

(和文) 檀国大学校

コーディネーター (所属部局・職・氏名)：(英文) Dept.of Korean Traditional Costume, Assistant Professor, Yoonmee PARK

5. 研究交流目標

5-1. 全期間を通じた研究交流目標

本研究は、ウズベキスタンと日本、中国、韓国の芸術大学において、“手漉き紙”文化と“芸術表現”をテーマに調査・復興・再生を目指し、美術やプロダクト、文化財保存修復に応用できる紙と技法を開発する活動を、芸術大学の連携により成し遂げるための芸術・文化拠点の形成を目指している。

“紙”は、人類の根源的な文化形成における重要なメディアとして発展と交流、多様化を繰り返してきた。しかし、古来から伝わる“手漉き紙”文化は世界的に衰退傾向にあり、それらは大量生産時代の経済性や生活そのものの近代化など需要の変化によるものである。例えばウズベキスタンのサマルカンド紙は、硬筆によるカリグラフィー（書）やミニアチュール（細密画）の支持体として世界で最も美しいと言われた紙であるが約200年前に途絶えている。また、日本の和紙もユネスコの世界文化遺産として国際的な評価を得ているにもかかわらず、現在も衰退傾向が続き、後継者不足、従事者数の減少などに多くの問題を抱えている。

一方、紙の歴史や伝播をみると、タラスの戦い（751年）以降、この拠点形成を目指すアジアの国々は、過去1300年以上さかのぼっても“紙の道”として強いつながりを持つ関係にある。近代以前の紙の製法は人力と自然力によるもので、地域性、歴史性を象徴する多くの文化の跡が潜んでおり様々な情報を読み解くことができる。また紙に書（描）かれた文字や図、絵画などの表現は、日本、中国の古典絵画や、ウズベキスタンのミニアチュールなど、文化、経済、宗教など様々な目的の情報伝達を果たしてきた。

この“手漉き紙と芸術表現”の課題を芸術大学の連携により研究することは、国際的な芸術の分野において地域性と時間軸を縦横に結ぶ文化を融和させる取り組みであり、単なる伝統的な紙や技法の復元ではなく、新たな技術や概念を形成し現代ニーズに向き合うメディアとプロダクトを生み出しうる研究交流の形を目指すことができる。また本計画はウズベキスタンのサマルカンド紙の復興を軸に、紙の道（アジアを結ぶペーパーロード）として、日本側のリーダーシップと中国、韓国との協働により、保存修復の文化事業や新素材

の開発、新しい芸術活動への応用など“手漉き紙と芸術表現”の意味を現代において再定義し、各国の独自性と多様性の表出による地域文化の醸成を目指すことを目標としている。

5-2. 平成29年度研究交流目標

＜研究協力体制の構築＞

本事業の研究協力体制は、拠点機関として、ウズベキスタン芸術大学（ウズベキスタン）、大連民族大学（中国）、檀国大学校（韓国）の芸術系大学の連携によって構築する。

ウズベキスタン芸術大学は、本事業のメインテーマであるサマルカンド紙の復興において最も重要な研究拠点である。同校は、ウズベキスタンにおいて唯一美術の学位を授与できる高等教育機関であり、著名な画家、アーティストなど多数が教鞭をとり、ミニアチュールなどサマルカンド紙に関連した研究者が最も多い。これまで同校とは事前協議を繰り返し、3年間の長期に渡る本事業の研究実施に向けて最適な研究者による布陣を構築した。平成29年7月に日本においてキックオフミーティングを開催するため、まずは学長、コーディネーター、専門の研究者を日本に招聘し、本事業遂行の上での意思統一とサマルカンド紙の復興に関する実務レベルでの協議を行う。現状では難しいサマルカンド紙の現物調査（携帯顕微鏡での調査）の実施体制の構築を打合せし、調査に関する方法やスケジュールなど意思統一を行う。また、本学の和紙研究や保存修復事業との技術面での交流として、名古屋城本丸御殿の視察や製紙の用具類に関する公開授業を同時に開催する予定である。また、今後の3月に行うウズベキスタンでのセミナーは、同校主催で開催し、各拠点の1年間の調査研究の成果を持ち寄り、研究交流を深める場として予定している。

中華人民共和国（以下中国）の大連民族大学とは、これまでにグラフィックおよびプロダクトデザイン領域において交流が深く、展示会の双方の大学での交互開催や、日本-中国のデザイン教育シンポジウムも共同開催した実績もあり、本事業に関しても研究協力者と交流し事前ミーティングを積み重ねてきている。まずは6月に日本側コーディネーターが大連に出向き、本事業の協議と合わせ、中国での研究協力体制の確認と2年目のセミナー開催についての正式に依頼を行う。また、中国における紙漉き文化継承に注目し、他の中国国内の関連地域へも調査研究の拡張を模索し、2年目の共同研究とセミナー開催を目標に交流を深めていく予定である。

大韓民国（以下韓国）・檀国大学校とは、本事業ではセミナーの開催は行わないが、5月に日本側コーディネーターが檀国大学校に出向き、本事業の協議と合わせ、韓国での研究協力体制の確認と、朴允美准教授を中心に韓国紙の歴史、伝統技法やプロダクトなど調査研究を予定している。

それぞれの拠点での成果は、平成30年3月ウズベキスタンで行う、S-1「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ～サマルカンド紙の復興を中心に～」で、それぞれの拠点による成果の発表を行う。

＜学術的観点＞

ウズベキスタンは紙が中国から最初に伝播した地域であり、中国、韓国は紙の起源、日本

は正倉院文書など1300年の歴史を持つ和紙文化が現在も多様性を継承しているなど、紙の道として、歴史や伝播、発展においてこの連携国は極めて重要な関係にある。本研究交流課題に掲げる“手漉き紙と芸術表現”は、情報伝達を司る文化融合の要として、いわゆる“メディアとしての紙”の役割が芸術表現行動とともに発展してきた点で、感覚的と思われがちな芸術行動を科学的な視座に導く、理論研究への礎を築くものとして計画している。そこでは、古典絵画や保存修復学の研究にとどまらず、現代に生きるアイデンティティを再定義する活動として芸術表現学全般やデザイン学に通じる成果が期待できる。

また、“手漉き紙と芸術表現”という研究態度は、その時代の紙の歴史的裏付けを、紙と技法との関連性から検証する視点である。例えばサマルカンド紙を使用したコーランやミニアチュールなどの表現に関しても、現状では当時の技法は断絶し不明な点も多い。2008年にJICAの行った復興では、原料は桑で製紙し、米粉を塗布し磨いて制作するが、衰退前のサマルカンド紙は、おそらく麻（リネン）のボロ布から作られた紙も混在し、多様性の表出や文化財保存修復的観点からは、まだまだ多くの研究余地がある。

これらの観点から、平成29年度は、まずはメインテーマであるサマルカンド紙の調査に注力し、ウズベキスタン芸術大学とコーランやミニアチュールの現地調査を共同で行うことにより、8世紀頃にサマルカンドの工房から派生していった、イスラム世界の紙についての知見を深める。また、紙のみならず書写・描画技法の探求も行い、芸術表現研究として総合的な視点からの解明を目指す。これにより事業全体の目標であるサマルカンド紙の復興の達成に向けて、芸術大学連携ならではの成果を得ることができると考えている。

<若手研究者育成>

芸術大学の拠点連携において、“手漉き紙と芸術表現”に注目した事業の利点は、全ての分野に紙と芸術表現への接点が見出せることである。絵画表現、版画表現、造形、デザインさらに理論研究も、支持体としての紙がなければ実現できないものであり、この制作・表現を極める研究態度は、芸術を志す者の国際的な共通認識であると考えている。

本事業での若手研究者の育成は“紙からつくる芸術表現行動”として、意欲のある研究者が自ら紙への価値観を見出しながら参画できる①【展覧会】、②【プロジェクト研究の推進】、③【大学院博士（前期・後期）課程などの授業、研修、留学の活性化】などを念頭に、できる限り若手研究者や博士課程学生が海外での研究・発表機会に恵まれるような育成プログラムを目標としている。平成29年度は下記の内容を予定している。

① 【展覧会】国際交流展覧会への相互参加の推進

3月に開催するS-1セミナー「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ～サマルカンド紙の復興を中心に～」では、国際交流展を同時開催する予定である。これまで日本で実施してきた「和紙素材の研究展」を国際展として発展させ、手漉き紙を使用した作品や復活させた手漉き紙そのものの展示、また共同研究におけるサマルカンド紙などの試作紙の成果発表、ポスター展示等を盛り込み、若手研究者を中心とした国際交流展の機会を設ける。

② 【プロジェクト研究の推進】“手漉き紙”文化継承をテーマに、複数の共同プロジェクトを計画

(i) [R-1：サマルカンド紙の調査研究]に関する研究プロジェクトは本事業において重要な共同研究にあたり、サマルカンド紙や技法の調査、紙の復元などを行う。ウズベキスタン芸術大学にはミニアチュール作品などの研究者が多いことから、本調査研究を通じて各国の若手研究者が経験を積める場を提供できると考えている。

(ii) [紙からつくる芸術表現行動]は、自ら制作した紙での芸術表現を実施する活動を意味し、これまで和紙素材の研究として10年間活動した実績がある。平成29年度もこの研究を発展させる為に、現役学生と卒業後も研究のキャリアを積みたい若手作家達を広く受け入れるプロジェクトとして、愛知県立芸大和紙工房で実施する。

(iii) [文化財保存修復研究所におけるプロジェクト]としてサマルカンド紙やミニアチュールの復元・模写など、技術を要する研究事項があれば、本研究においても同研究所のプロジェクトとして研究実施を行うことを視野に入れている。同研究所は、これまで国内外の保存修復に関する研究物件を、現役学生や卒業後の研究・研修生が業務に従事することを通じて技術力の向上など目指し運営している。

③ 【大学院博士（前期・後期）課程などの授業、研修、留学の活性化】（本事業経費外）

中国・大連民族大学とはこれまでも留学、研修の実績が豊富で、特にデザイン研究分野では交流がすすんでおり、これまで中国人留学生のうち、大学教員7名、専門学校校長1名、グラフィックデザイナー6名の人材育成に至った成果があがっている。

平成29年度は、中国から大学院博士前期課程に6名の留学生を新たに迎えている。博士後期課程への進学を視野に研究を行う研修生も、[紙からつくる芸術表現行動]を研究テーマに取り入れている。また、大学院特別研究（和紙素材の研究）の授業においては、和紙を学ぶため、日本の他大学の学生や、欧米・アジア圏留学生も受講予定である。

今後も留学生や研修生の受入など促進できるよう和紙工房の整備にも努めていく。さらに連携国の芸術大学に古来の紙を復元する為の製紙工房の導入支援も検討している。

<その他（社会貢献や独自の目的等）>

“紙からつくる芸術表現行動”の取り組みに関して、研究代表者が中心に行う和紙素材の研究という授業の形で、和紙工房の視察、古典技法の調査・復元などを実施する。また発表の機会として、紙から制作した作品による展覧会活動「和紙素材の研究展」を開催する。同展はこれまで大学院特別研究の授業の一環として行っており平成30年3月に名古屋において開催する計画をたてている。さらに講演活動なども国内外で積極的に実施する。

6. 平成29年度研究交流成果

（交流を通じての相手国からの貢献及び相手国への貢献を含めてください。）

6-1 研究協力体制の構築状況

平成29年度は、6月にウズベキスタン側研究者を招聘しキックオフミーティングを行い、この調査におけるウズベキスタンでの博物館等の文化遺産の閲覧方法について、具体的な調査計画を協議した。特に平成30年度に向けて、古い写本紙片や繊維の提供を求め

る許可を得るため、より強固な研究協力体制の構築に注力した。これによりウズベキスタン芸術大学に加え、新たに、科学アカデミー東洋大学、イスラム大学、サマルカンド大学（図書館・博物館）とMOUの協議まで終わっており、平成30年5月に締結を予定している。また、同時期にタシケントにおいて本研究の報告会実施を計画しており、さらにタシケント国立図書館、ウズベキスタン芸術アカデミーなどの機関と研究協力関係の協議を行う予定である。よって、平成29年度のサマルカンド紙調査に関する研究協力体制の構築は、平成30年度にむけて大きく前進し、全期間を通じた目標に対し当初の予定以上の構築状況となっている。

共同研究ではR-1 サマルカンド紙と、紙の道として関連するR-2 中国、R-3 韓国、関連する欧州の調査研究を実施し、これらの機関との研究協力体制を構築し、今後の研究計画を明確にした。R-2の調査として、平成29年6月、大連民族大学を訪問し、中国の宣紙を軸に紙文化研究の視点から中国紙の調査実施計画の具体化を行った。R-3の調査としては、韓国の檀国大学校を訪問し、韓紙の調査として朝鮮王朝実録の複製本制作事例調査と、槐山韓紙博物館、ソウル大学の視察を行った。

次年度の計画として、平成30年11月に、中国の大連民族大学ではS-2 中国セミナーを実施し、同セミナーにおいては“紙の伝播と多様性”をテーマとし、本事業の2年目の共同研究成果の報告とセミナー、展覧会を開催する予定である。

韓国の檀国大学校とは、本事業ではセミナーの開催は行わないが、平成30年12月、愛知県立芸術大学と豊田市との共同研究（本事業経費外）において、手漉き紙と芸術表現をテーマとした「和紙素材の研究展VI+韓紙」を開催予定であり、本事業のテーマにおいても国際交流の場を設定している。

6-2 学術面の成果

平成29年度のR-1 共同研究においては、200年前に途絶えたサマルカンド紙の復興・再生に関し、その実態が徐々に明らかになっている。この研究は、本事業で取り組む“手漉き紙と芸術表現”の紙そのものや表現技法に関する研究であり、ウズベキスタンでも研究の事例が少ない。現状のユネスコやJICAが行ったサマルカンド紙の復興プロジェクトでは、原料は桑で製紙し米粉を塗布し磨いて制作するが、これまでの調査では綿の古布を原料とした事例が多くこれまでの定説と食い違っていた。また、ウズベキスタン内でも製法、原料、性質、地域や時代の差、その紙の活用において、明確なサマルカンド紙の定義に至っておらず、どのように制作された紙であるかなどは、更なる調査が必要である。そこで、S-1 セミナーにおいてサマルカンド紙はどのような紙なのかの議論を行い、サマルカンド紙の定義は、「約1200年前にサマルカンドで製紙技術が確立し、その製紙の伝統を引き継ぐ紙」という認識で一致することができた。今後、この議論を深め、サマルカンド紙の定義をさらに明確にしていく。

サマルカンド紙の調査方法として、本研究で考案した携帯マイクロスコープによる量的調査と、古い紙の紙片を日本に持ち帰り厳密に調べ上げる質的調査を合わせることは、サマルカンド紙の解明に有効な結果をもたらす方法ではないか考えている。さらに、この調

査方法は、紙の道として関連する R-2、R-3、R-4 の調査結果と融合すれば、アジアを中心とする紙の伝播と多様性という点で、新たな知見が見出されることにも期待できる。これらの成果は平成30年度の新たな協定により、古い紙の調査例を増やすことで、さらに明確にサマルカンド紙の実態が明らかにできると考えている。

サマルカンド紙の試作に関しては、定説の桑原料と、綿・麻などの布を由来とした製紙方法を検討している。平成29年度は、サマルカンド産の桑と日本で採集できる桑の2種類の紙を制作した。その際、サイジング材としては、米、麦を由来とした澱粉を塗布し磨きあげる方法を実施した。

また、紙に書かれた書写や細密画の描画技法の探求も行っているが、イスラム美術などの芸術表現として総合的に最高レベルの作品がこれまでウズベキスタン内での調査においては見つからず、海外の美術館・博物館に離散している可能性があることがわかった。これらの観点から、かつてウズベキスタンで制作された優れた細密画作品に関しても、体系的に調査する必要があることがわかった。次年度は、海外の美術館・博物館事例も含め、その概要を把握したいと考えている。

6-3 若手研究者育成

現在、本研究メンバーは、若手研究者主体の参画において実施しており、展覧会、プロジェクト研究の推進、大学院博士（前期・後期）課程などの授業、研修、留学の活性化などを念頭に行っている。

S-1 セミナーとあわせて行った展覧会には、若手研究者が、日本側5名、中国側3名が、ウズベキスタンでの国際交流展に出品した。

プロジェクト研究として、サマルカンド紙の解明や歴史研究、細密画表現や金彩の研究など、若手研究者とテーマを分担しながら取り組んでおり、S-1 セミナーにおいて共同で成果を発表した。

次年度の S-2 中国セミナーにおいては、展覧会や共同研究の報告など、若手研究者に広く研究成果や作品発表などの機会を設定する予定である。

平成30年度の5月に実施する、サマルカンド大学のセミナーでは、大学院学生主体の講演を予定している。また、紙の研究と合わせ、古く朽ち果てた写本の修復方法の検討も依頼されており、日本の和紙を使った修復方法の研究も予定している。これらは、博士後期課程を修了した若手研究者の参画を予定している。

その他、本事業経費外であるが、平成29年9月に「和紙素材の研究展Vニューヨーク展」を開催し、若手研究者26名がニューヨークでの海外展に出展した。さらに平成30年12月に韓国において「和紙素材の研究展VI+韓紙」を計画しており、本研究の成果発表と合わせ、幅広く若手研究者が出品できる国際交流展を開催する予定である。

6-4 その他（社会貢献や独自の目的等）

本研究の進捗に合わせた愛知県立芸術大学の和紙工房の充実を計画した。これにより、サマルカンド紙の復元研究に必要なであるホーレンダーピーターを、同大学法人予算で新た

に導入し、手漉き紙と芸術表現の研究の活性化や、綿など布由来の紙の制作にも取り組める体制の構築を予定している。

また、公開講座「紙の道の文化史—正倉院からサマルカンドまで」を本研究と関連づけて計画し、学術講演会 1 回、公開講座 4 回の実施を予定している。平成 30 年 10 月から平成 31 年の 1 月までの期間において、愛知県立大学との連携により実施予定である。

6-5 今後の課題・問題点

本研究の中心的なテーマであるサマルカンド紙の解明は、これまで様々な論説がある中、未だ不明な点が多い研究分野であり、今後、量的に十分な数の古い写本の調査などを実施することにより、原料や製法の解明を目指すものである。本研究の範疇においてはウズベキスタン内のタシケント、サマルカンドでの研究であるが、紙の伝播についての研究に関しては周辺の地域や諸外国の調査も必要であり、この研究に関連した研究事業の立ち上げなど検討しなければならない。ただし、携帯型マイクロスコプの撮影例が増えてくれば、紙の製法や原料の関連性などを確認することが可能となり、製紙文化の流れがより一層明確になると考えている。

また、ウズベキスタン内において写本や細密画の調査を継続しているが、海外の博物館で見られるような、かつてウズベキスタンで制作された質の高い細密画を模写の題材として探しているが、なかなか高いレベルのものが見つからない。これは、様々な時代において、ウズベキスタンの質の高い美術品が離散している実態があるのかもしれない。これらの現状把握も、本研究の遂行時において注視していきたい。

1 年間の研究機関を経て、研究協力体制は次年度においてはさらに充実した環境になるが、ウズベキスタンでの研究実施は、移動の計画や研究者派遣などのスケジューリングにおいて途上国ゆえの困難が生じることがあり、現地での協力体制をさらに明確にする必要がある。そのことから、次年度より名古屋大学ウズベキスタン事務所研究員を研究協力者として登録する予定である。

6-6 本研究交流事業により発表された論文等

- (1) 平成 29 年度に学術雑誌等に発表した論文・著書 0 本
うち、相手国参加研究者との共著 0 本
 - (2) 平成 29 年度の国際会議における発表 0 件
うち、相手国参加研究者との共同発表 0 件
 - (3) 平成 29 年度の国内学会・シンポジウム等における発表 0 件
うち、相手国参加研究者との共同発表 0 件
- (※ 「本事業名が明記されているもの」を計上・記入してください。)
- (※ 詳細は別紙「論文リスト」に記入してください。)

7. 平成29年度研究交流実績状況

7-1 共同研究

整理番号	R-1	研究開始年度	平成29年度	研究終了年度	平成32年度
研究課題名	(和文) サマルカンド紙に関する調査 (英文) The research for the Samarkand paper				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 柴崎幸次・愛知県立芸術大学・教授 (英文) Koji SHIBAZAKI, Aichi University of the Arts, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) (ウズベキスタン) Fazilat KODIROVA, National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod, Senior teacher				
29年度の研究 交流活動	<p>平成29年4～7月：〔基礎調査〕日本国内においてウズベキスタン、及び中央アジアの手漉き紙文化の情報収集。</p> <p>東京国立博物館（保存修復課）、東京大学（東洋文化研究所）、首都大学東京（牧野標本館）、国立民族学博物館（情報管理施設）、JICAなど先行研究関係者（水俣市金刺潤平氏）へのヒアリングを実施した。主に、柴崎、本田、鈴木が中心となり実施した。</p> <p>7月：〔調査分析〕日本にて、高知県紙産業技術センター、日本澱粉協会などの協力を得て、18世紀のサマルカンド紙の成分調査、分析を進めた。</p> <p>11月：【共同研究】サマルカンド紙に関する調査（写本・ミニアチュール調査）ウズベキスタン（タシケント、サマルカンド）。ウズベキスタン芸術大学との合同調査で、イスラム大学、サマルカンド大学、タシケント国立図書館、アムール・ティムール財団を訪問調査した。</p> <p>まずは、サマルカンド紙が使用された文化財の所在について調査した。また、その場で許可が下りたものに関しては、携帯マイクروسコープで撮影を行った。成分分析用サンプル紙を入手するために正式な依頼書を準備して、必要な場所は再度訪問の依頼をした。日本側は柴崎、本田、鈴木、佐藤を6日間タシケント、サマルカンドに派遣した。</p> <p>12月：〔調査分析〕高知県紙産業技術センターにて、18世紀のサマルカンド紙の成分調査、分析を進めた。</p> <p>12月～2月：〔試作〕愛知芸大和紙工房にて、サマルカンド紙試作実験を行った。</p> <p>2月：【セミナー・展示開催】ウズベキスタンセミナー（ウズベキスタン芸術大学）において、国際交流展の実施、講演・報告の実施に合わせ、サマルカンド紙の解明に関する議論を行った。またイスラム大学より、</p>				

	<p>紙片サンプルの提供を10点受けた。</p> <p>日本から柴崎、本田、鈴木、兪、富樫を、5日間タシケント、サマルカンドへ派遣した。</p>
<p>29年度の研究 交流活動から得 られた成果</p>	<p>主に日本とウズベキスタンとの共同研究により、古い写本やミニアチュールについての調査を実施することで、サマルカンド紙がどのような紙であったのかを解明すること、また中央アジアの紙という情報の少ない分野において、これまでの先行研究を分析し、研究を進める方法を明確にすることであった。</p> <p>本年度の研究において、これまでサマルカンド紙は、桑や亜麻（リネン）などの材料であるとされてきたが、実際は綿（コットン）が多く見られることがわかった。今後さらに古い写本の閲覧及び携帯マイクロスコブ撮影と、紙片や繊維サンプルを日本に持ち帰り厳密な原料調査を行うことで、サマルカンド紙の解明に繋がると考えている。本年度は1年目として、次年度の研究促進の土台を築くことができたことが成果である。</p>

整理番号	R-2	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 32 年度
研究課題名	(和文) 中国紙に関する調査 (英文) The research for the Chinese paper				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 柴崎幸次・愛知県立芸術大学・教授 (英文) Koji SHIBAZAKI, Aichi University of the Arts, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) (中国) MA Chun Dong, Dalian Nationalities University, professor				
29年度の研 究交流活動	<p>平成29年4～7月：〔基礎調査〕日本国内において東アジアの手漉き紙文化の情報収集。</p> <p>東京国立博物館（保存修復課）、首都大学東京（牧野標本館）、国立民族学博物館（情報管理施設）へのヒアリングを実施した。主に、柴崎、本田、鈴木が中心となり実施した。</p> <p>6月：【共同研究】大連民族大学（大連）を訪問し、中国の古典絵画調査を軸に紙文化研究の視点から調査実施計画の具体化を行った。また、旅順博物館の視察、小嶺村宣紙工場、安徽省宣城宣紙博物館にて調査を行った。日本側は柴崎、佐藤を大連に3日間派遣し、中国側は周、金が実施した。</p> <p>3月：【セミナー・展示開催】ウズベキスタンセミナー（ウズベキスタン芸術大学）において、和紙、中国紙、韓国紙の報告を行い、参加者と議論を深めた。</p>				
29年度の研 究交流活動から得 られた成果	<p>大連民族大学との共同調査により、紙の起源からいち早く発展を遂げたと言われる中国の紙に関する研究の範囲や方法などを協議した。また宣紙の制作工程を明確にまとめた。</p> <p>次年度は、現在の中国紙の実態とも照らし合わせ、紙の系譜を俯瞰的にまとめる形で進めていく。また、これらの研究は2年目の中国セミナーにおいて主要なテーマとして位置づけている。</p>				

整理番号	R-3	研究開始年度	平成 29 年度	研究終了年度	平成 32 年度
研究課題名	(和文) 韓国紙に関する調査 (英文) The research for the Korean paper				
日本側代表者 氏名・所属・職	(和文) 柴崎幸次・愛知県立芸術大学・教授 (英文) Koji SHIBAZAKI, Aichi University of the Arts, Professor				
相手国側代表者 氏名・所属・職	(英文) (韓国) Yoonmee PARK, Dankook University, Assistant Professor				
29年度の研 究交流活動	<p>平成29年4～7月：〔基礎調査〕日本国内において東アジアの手漉き紙文化の情報収集。</p> <p>東京国立博物館（保存修復課）、首都大学東京（牧野標本館）、国立民族学博物館（情報管理施設）へのヒアリングを実施した。主に、柴崎、本田、鈴木が中心となり実施した。</p> <p>5月：【共同研究】韓国の朝鮮王朝実録の複製本制作事例から、今後の調査実施に関するミーティングを行った。同時に槐山韓紙博物館、ソウル大学の視察を行った。日本側は柴崎、兪を3日間ソウル市へ派遣し、韓国側は朴が実施した。</p> <p>3月：【セミナー・展示開催】ウズベキスタンセミナー（ウズベキスタン芸術大学）において、和紙、中国紙、韓国紙の報告を行い、参加者と議論を深めた。</p>				
29年度の研 究交流活動から得 られた成果	<p>紙の起源からいち早く発展を遂げたと言われる中国及び朝鮮半島の紙に関する研究の範囲や方法などを協議した。また特に、韓国独自に製紙の復元を研究している「ウェイバル」という方法に関して、韓紙の制作工程をまとめることができた。</p> <p>次年度は、現在の韓紙の実態とも照らし合わせ、紙の系譜を俯瞰的にまとめる形で進めていく。また、次年度12月、愛知県立芸術大学と豊田市との共同研究（本事業経費外）において、手漉き紙と芸術表現をテーマとした「和紙素材の研究展VI+韓紙」を開催し、本事業のテーマにおいても国際交流の場を設定している。</p>				

7-2 セミナー

整理番号	S-1
セミナー名	(和文) 日本学術振興会研究拠点形成事業「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ~サマルカンド紙の復興を中心に~」 (英文) JSPS Core-to-Core Program “The research for the culture of contemporary Hand-Made Paper and artistic expression. ~With the focus on the revival of Samarkand paper~”
開催期間	平成 30 年 2 月 21 日 ~ 平成 30 年 2 月 23 日 (3 日間)
開催地(国名、都市名、会場名)	(和文) ウズベキスタン、タシケント、ウズベキスタン芸術大学 (英文) Uzbekistan, Tashkent, National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod
日本側開催責任者 氏名・所属・職	(和文) 柴崎幸次・愛知県立芸術大学・教授 (英文) Koji SHIBAZAKI, Aichi University of the Arts, Professor
相手国側開催責任者 氏名・所属・職 (※日本以外での開催の場合)	(英文) Uzbekistan, Fazilat KODIROVA, National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod, Senior teacher

参加者数

派遣先 派遣元	セミナー開催国 (ウズベキスタン)	
日本 〈人／人日〉	A.	5/ 36
	B.	2
ウズベキスタン 〈人／人日〉	A.	9/ 54
	B.	30
中国 〈人／人日〉	A.	2/ 12
	B.	0
韓国 〈人／人日〉	A.	1/ 6
	B.	0
合計 〈人／人日〉	A.	17/ 108
	B.	32

A. 本事業参加者（参加研究者リストの研究者等）

B. 一般参加者（参加研究者リスト以外の研究者等）

※日数は、出張期間（渡航日、帰国日を含めた期間）としてください。これによりがたい場合は、備考欄を設け、注意書きを付してください。

<p>セミナー開催の目的</p>	<p>本事業の研究課題「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ～サマルカンド紙の復興を中心に～」に関する、第1回目のセミナーであり、“手漉き紙と芸術表現”に関する発表と、共同研究により調査したサマルカンド紙の解明と紙に関する調査報告を実施しこのテーマについて議論を深めることが目的である。</p> <p>サマルカンド紙の解明の関しては、特に古い写本やミニチュールの紙の調査報告、各国の紙の同時代比較など実施した結果を報告する。さらに参加研究者のパネル展示（ポスターセッション）、ワークショップ、展示（手漉き紙と芸術表現に関するもの）を実施する。</p>		
<p>セミナーの成果</p>	<p>セミナーでは、各拠点校から（1）「現代に生きる“手漉き紙と芸術表現”の研究 ～サマルカンド紙の復興を中心に～」、（2）和紙の歴史、（3）朝鮮王朝実録の複製本制作、（4）サマルカンド紙について、の報告講演を実施した。</p> <p>セミナー参加者で、サマルカンド紙はどのような紙なのかに関しての議論を行った。さらに、現時点におけるサマルカンド紙の定義についてまとめた。</p> <p>“紙からつくる芸術表現”のテーマに関して、各国の紙で制作した作品の展覧会を実施した。各国の紙と、試作したサマルカンド紙について製本しまとめたものや成果物を発表した。また、関係国の拠点機関でのカリキュラムなど情報交換を行った。</p> <p>このセミナーにより、科学アカデミー東洋大学、イスラム大学、サマルカンド大学の3機関が、調査用紙片の提供に協力を表明し、今後MOUなどの大学間協定を推進することに至った。</p> <p>さらに、今後の研究を活発化するための協力体制の強化や、各拠点による関連研究の推進や教育環境の整備を進めることを確認することができた。</p>		
<p>セミナーの運営組織</p>	<p>ウズベキスタン芸術大学と愛知県立芸術大学が共同で実施した。また事務支援は、ウズベキスタン芸術大学事務局及び愛知県立芸術大学学務部芸術情報課が行い、名古屋大学ウズベキスタン事務所の協力を得た。</p>		
<p>開催経費 分担内容 と金額</p>	<table border="1"> <tr> <td data-bbox="379 1771 571 2051"> <p>日本側</p> </td> <td data-bbox="571 1771 1378 2051"> <p>内容</p> <p>国内旅費 (45,160 円)</p> <p>外国旅費、謝金 (1,549,764 円)</p> <p>消耗品購入費 (30,263 円)</p> <p>デザイン・印刷費 (95,025 円)</p> <p>外国旅費・謝金等に係わる消費税 (別経費にて充当)</p> </td> </tr> </table>	<p>日本側</p>	<p>内容</p> <p>国内旅費 (45,160 円)</p> <p>外国旅費、謝金 (1,549,764 円)</p> <p>消耗品購入費 (30,263 円)</p> <p>デザイン・印刷費 (95,025 円)</p> <p>外国旅費・謝金等に係わる消費税 (別経費にて充当)</p>
<p>日本側</p>	<p>内容</p> <p>国内旅費 (45,160 円)</p> <p>外国旅費、謝金 (1,549,764 円)</p> <p>消耗品購入費 (30,263 円)</p> <p>デザイン・印刷費 (95,025 円)</p> <p>外国旅費・謝金等に係わる消費税 (別経費にて充当)</p>		

	(ウズベキ スタン) 側	内容 セミナー会場提供 国内開催費用 国内研究者旅費
--	-----------------	-------------------------------------

7-3 研究者交流（共同研究、セミナー以外の交流）

共同研究、セミナー以外でどのような交流（日本国内の交流を含む）を行ったか記入してください。

日数	派遣研究者		訪問先・内容		派遣先
	氏名・所属・職名		氏名・所属・職名		
6 日間	National Institute of Fine Art and Design named after Kamoliddin Bekhzod ・ Senior teacher Fazilat KODIROVA ・ Lecturer Ziyakhanov Khurshid DJAVIDOVICH		愛知県立芸術大学 ・教授 柴崎幸次		キックオフミーティングを開催し実施計画の確認を行う。NIFAD大学代表者を愛知県立芸術大学に招聘し、ここから実質的な研究をスタートさせる。また、愛知県立芸術大学の和紙研究や保存修復事業との技術面での交流、製紙の用具類に関する公開授業を開催する。さらに、名古屋城本丸御殿の視察、徳川美術館などの協力を得て、日本の料紙の調査を共同で行う。

7-4 中間評価の指摘事項等を踏まえた対応

(※B. アジア・アフリカ学術基盤形成型は記載不要)

8. 平成29年度研究交流実績総人数・人日数

8-1 相手国との交流実績

派遣先 派遣元	四半期	日本	ウズベキスタン	中国	韓国	合計
日本	1		()	2/10 ()	2/9 ()	4/19 (0/0)
	2		()	()	()	0/0 (0/0)
	3		4/29 ()	()	()	4/29 (0/0)
	4		5/35 ()	()	()	7/66 (0/0)
	計		9/64 (0/0)	2/10 (0/0)	2/9 (0/0)	15/114 (0/0)
ウズベキスタン	1	2/12 (2/12)		()	()	2/12 (2/12)
	2	()		()	()	0/0 (0/0)
	3	()		()	()	0/0 (0/0)
	4	()		()	()	0/0 (0/0)
	計	2/12 (2/12)		0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	2/12 (2/12)
中国	1	()	()		()	0/0 (0/0)
	2	()	()		()	0/0 (0/0)
	3	()	()		()	0/0 (0/0)
	4	()	2/12 ()		()	2/12 (0/0)
	計	0/0 (0/0)	2/12 (0/0)		0/0 (0/0)	2/12 (0/0)
韓国	1	()	()	()		0/0 (0/0)
	2	()	()	()		0/0 (0/0)
	3	()	()	()		0/0 (0/0)
	4	()	1/6 ()	()		1/6 (0/0)
	計	0/0 (0/0)	1/6 (0/0)	0/0 (0/0)		1/6 (0/0)
合計	1	2/12 (2/12)	0/0 (0/0)	2/10 (0/0)	2/9 (0/0)	6/31 (2/12)
	2	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)
	3	0/0 (0/0)	4/29 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	4/29 (0/0)
	4	0/0 (0/0)	8/53 (0/0)	0/0 (0/0)	0/0 (0/0)	10/84 (0/0)
	計	2/12 (2/12)	12/82 (0/0)	2/10 (0/0)	2/9 (0/0)	20/144 (2/12)

※各国別に、研究者交流・共同研究・セミナーにて交流した人数・人日数を記載してください。(なお、記入の仕方の詳細については「記入上の注意」を参考にしてください。)

※相手国側マッチングファンドなど、本事業経費によらない交流についても、カッコ書きで記入してください。

8-2 国内での交流実績

1	2	3	4	合計
8/13 (0/0)	1/2 (0/0)	4/5 (0/0)	1/1 (0/0)	14/21 (0/0)

9. 平成29年度経費使用総額

(単位 円)

	経費内訳	金額	備考
研究交流経費	国内旅費	374,530	
	外国旅費	3,484,729	
	謝金	967,500	
	備品・消耗品 購入費	840,371	
	その他の経費	702,817	
	不課税取引・ 非課税取引に 係る消費税	0	別経費にて充当
	計	6,369,947	
業務委託手数料		637,600	
合 計		7,007,547	

10. 平成29年度相手国マッチングファンド使用額

該当なし。

※交流実施期間中に、相手国が本事業のために使用したマッチングファンドの金額について、現地通貨での金額、及び日本円換算額を記入してください。